

韓国における過労死問題の社会経済的背景

姜守丕（ガン・スドル） 高麗大学校、労使関係論

青木圭介 訳

1. はじめに

長期にわたる豊かな国への経済発展の過程で、日本人は死ぬほど懸命に働いてきた。韓国にとっても同じことが言える。韓国は日本の後を追ってきたように思われる。

2016年、韓国人は平均、年2,069時間働いた。彼らは実際に、日本人（1,713時間）よりも20パーセント多く、ドイツ人（1,363時間）よりも50パーセント多く働いている。

2017年には、韓国で公式に認められた働きすぎ（過労）による死亡者の数は、ここ数年間の年間死亡者数より300以上多い記録的な高さに達した。この過労死のほとんどは脳心臓疾患によるものである。当局によって公式に認定された割合が20パーセントに当たるという事実を考慮すると、韓国における過労死した労働者の数は、1,500人を超えているはずである。

私は、今日韓国では、年間、約1万人の人びとが労働や職務が過重なために、亡くなっていると推定している。

過労死は、仕事上の事故でもなければ、個人的な問題でもない。それは構造的で社会的な問題である。労働だけでなく労働社会の社会経済的構造に対する我々の主観的な態度は、不用意にも過労死を生み出すにあたって、ある種の共犯関係に立っている。

私の仮説：過労死は、（心理的に内面化され、構造的に促進された）働き中毒の結果であるが、それはまた、粗暴な近代化の歴史的結果でもある。

2. 働きすぎの韓国人 —— 統計からは見えない3つの現場

しかし、人数は、生活過程の真相を十分に伝えていない。

第1の現場：現代自動車 1997年のアジア金融危機によって引き起こされたリストラ以来、毎年約20人の労働者が過労によって死亡している。1998年の大量解雇に対する労働者の抵抗が酷い敗北を被った後、「雇用が続いている間は、可能な限り働いて儲ける」という態度が広がっていた。たとえ働きすぎの労働者が急死しても、同僚たちは黙々と働き続けた。

ヒュンダイ（現代自動車）の労働者の約70パーセントは、筋骨格系疾患を患っている。それにもかかわらず、労働組合員のあるものは、労働時間を年3000時間に制限するという労働組合のガイドラインを撤回するよう声をあげた。他の活動家たちは、「職業継承」権に関する新しい労働協約さえ要求していた。

第2の現場：公務員 行政中心複合都市世宗（セジョン）にある健康福祉省の35歳の公務員であり、3人の子供のいるワーキング・マザー、キムさんは、2017年1月のある日曜日の早朝、突然死した。3年間の産休から復帰していたので、彼女は週70時間働かなければならなかった。彼女は、組織の目に見えない圧力の下で、また、産休の後だという罪悪感から、業績を上げて面目を保とうと奮闘していた。

ちょうど半年後、同じ部署の公務員リーさんが自殺した。彼は、過労と能力主義による人事評価からくる高血圧が原因の慢性疲労と抑うつ症を患っていた。彼の死は過労自殺であり、成島出の日本映画『ちょっと今から仕事やめてくる』（2017年）の通りである。

第3の現場：IT労働者 九老（グロ）にあるソウルデジタル産業団地では約20万の人が雇用されており、その65パーセント（13万人）は20代または30代である。この産業団地で、ゲーム・ディベロッパーとして週60～70時間働いていた6人が2016年以降に亡くなった（Jeong, 2017）。

「ある従業員は冠動脈硬化を発症する前の12週間に、不規則な夜間労働と過度の負担を負わされていた」、また、ある従業員は「症状が現れる前4週間は週78時間働いていたし、最後の7週間は、89時間働いていた」。

ある労働者は「深夜までの労働を繰り返していると、私の自尊心が会社から生まれるのを感じる。私の目標達成は私の自尊心になる。長時間の労働が終わると、会社のために働く以外に、自分の存在意義を見つけることができなくなる」と、打ち明けている。

3. なぜ韓国人は死ぬほど働くのか？ ——社会経済的背景

第1に、生活状態が充分とは言えない上に、生活水準が上がってきている（「顕示的消費」）ので、「第1の現場」の例を見ても分かるように、死ぬほど働くよう強要されている。

さらに悪いことには、（1997年以降の）IMF方式のリストラに続く労働市場のネオリベラル改革、つまり管理的レイオフや雇用の柔軟化だけでなく、社会福祉システムの欠落が問題を深刻化した。

相対的に強い労働組合が存在しているにもかかわらず、労働者たちは、今では何時レイオフされるか恐れている。労働組合でさえ、会社の命運と直結しているので、労働者を満足に守ることができない。

第2に、家父長的文化や性差別の下では、働く母親の二重の負担が過労に追い込み、過労死することも少なくない。彼女たちは、時間の欠乏と不平等の両方に苦しんでいる。

理想の母親の社会的基準が高すぎるので、彼女たちは期待に応えられなければ罪悪感を覚えることになる。「スーパー母親であれという過大なプレッシャーがある。子供から離れて何かを始めようとするとき、私は罪の意識に立ち止まる」とリーは言っている。

第3に、「第3の現場」のような、20代30代の若い労働者が多数を占める新しい「ITセク

ター」においてさえ、彼らは、いわゆる「情熱給」を受け取る。その上、「ただ働きの」働きすぎは日常茶飯である。

多くの労働者は、「時間に追われている」とときには特に、**不規則な夜間労働**や長期にわたる**重すぎる負担**に晒されている。週に70時間～90時間働くことが普通になっている。そうしなければ、**雇用保障**の見通しは無い。

脅迫的な「**ストレスによる管理**」は、このセクターにも影響を及ぼしている。**業績に基づく競争システム**とともに、ゲーム産業における**過当競争**が、事態をさらに深刻化している。

しかしながら、これらの要因は、ほとんどが外的なものであり、なぜ人々は死ぬまで働きすぎるのかについて、十分に説明することはできない。我々は、繰り返される過労死を説明する未解明の部分を見つける必要がある。

このために、我々は次のように問わなければならない。なぜ人びとは自身の生活水準に満足しないのか。なぜ労働組合は真の改革のために戦わないのか。なぜ労働者たちは「非人道的」状況に対して連帯して戦わないのか。なぜ忙しく働く人が仕事の無い人よりも尊敬されるのか。

一步前へ進んで：働き中毒

もし砂糖のようなものの中毒になると、人は砂糖に依存するようになる。その中毒がひどくなってくると、満足感や幸福感を得るために、どうしても増々多くの砂糖を摂ってしまう。しばらくすると、砂糖なしでは、不幸になり、落ち込むようになる。同じことが労働にも当てはまる。働き中毒である。

労働は人生の中心である。我々は国の労働力の第二世代、第三世代として生まれてきた。仕事は社会的地位となり、仕事だけがアイデンティティーとなった。仕事を失うことは、アイデンティティーを失うことである。

働き中毒は、感覚、思考、活動を麻痺させる。働き中毒になると、働いている間は、安心感があり、保護されている感覚があり、ワクワクするような興奮さえ感じる。しかしながら、その先は死である。葬儀の後、あるいは葬儀が行われている時でさえ、生き残った人びとは、何もなかったかのように、せっせと働いている。

働き中毒が他の中毒と違うのは、通常は非難されないことであり、それどころか高く評価され、組織的に奨励されることである。今や問題は次のようになる。人びとは如何にして、この致命的な働き中毒になるのか。

より深い一步：集团的トラウマまたは集团的恐怖

ハイデ (H. Heide (1997) は、さらに先に進む。彼は人びとが必死になって逃れようとする苦痛はどこから来るかを問題にする。その答えは、近代化の過程で資本と国家によって加えられた圧倒的な暴力にある。ヨーロッパでは、暴力、特に囲い込み運動とそれに続く「救貧法」の時代に、抵抗する者に対する残酷な刑罰を含む暴力が、生き残った人びとに

集団的トラウマと恐怖を残した。

圧倒的な力によって、繰り返しトラウマを抱え、失望した人びとは、生存の恐怖から、ようやくある戦略、つまり勝利した体制との一体感を身につけるようになった。

今では人びとは、自らの解放や自由を夢見ることはなくなり、彼ら自身のアイデンティティーや歴史を忘れることによって、与えられた体制の中での生き残りと成功を夢見るようになった。そしてこのこと、つまり、意欲に満ちた労働力の創出が、資本主義発展のための必要不可欠な前提条件であった。

さて、韓国の歴史。民主的な改革を目指した1894年の東学農民革命（東学党の乱）に対する血の鎮圧以降、日本帝国主義は、共同体の文化(*maul, gye*)だけでなく、自律的労働組織(*dure, pumasi*)も系統的に破壊し始めた。その残虐行為の頂点が、世界中に広まった、約20万に達する兵士への「性奴隷」の動員であった。

役に立つ労働力を創出する準備として、1945年から朝鮮戦争が終わる1953年に至るもう一つの時代が必要であった。朝鮮戦争以前に、何十万の人びとが家族や隣人の目の前で容赦なく殺されていた。もちろん、全体で500万人以上の命を奪った朝鮮戦争は、現実の人間に対する大虐殺であった。

生き残った人びとにとって、すべてが集団的トラウマを与え、そして、集団的な恐怖、すなわち生存の恐怖をもたらすものであった。ほとんどすべての人々がイライラし、希望を失い、無力であった間、よく知られた「アカ恐怖症」（反共主義）が社会全体を支配していた。

そして、ちょうどその時、韓国の経済を発展させるために政治権力を握ったのが朴正熙（パク・チョンヒ）であった。朴正熙の神話は、「漢江の奇跡」と同じく、この歴史的背景が分かるとよく理解できる。新たな軍事政権は、トラウマと恐怖の代わりに、人々に経済発展と物質的・社会的成功を吹き込んだ。

このことの持つより大きな意味は、人々が経済成長の論理を内面化すればするほど、彼らの心は、ますます虚しさを感じる、ということである。それはいつそう傷つける。苦痛を忘れたり抑制したりするために、彼らはますます働き中毒になる。1987年夏の労働者の大争議は、韓国の民主化をいくらか進めたにもかかわらず、働き中毒という現実を変えることはできなかった。反対に、人々は「産業戦士」として彼らの生活を「犠牲にした」埋め合わせとして、明白に物質的利益を求めて闘うことができるようになった。人間としての「階級の解放」の代わりに、彼らは「公平な分配」を要求したのである。

この期間（1987年から1997年まで）、韓国の労働運動は、第二次世界大戦の戦後期の復興を満喫した。生産のより大きな分け前を獲得することによって、勇ましい労働者でさえ、韓国経済の競争力を損なう意図はなく、資本主義的競争のなすに任せたのである。

まさにこの時、IMFが1997年緊急援助計画を持って介入してきた。緊急支援融資（1998年以降）と引き換えに、名高い新自由主義的リストラ攻勢が、韓国の勤勉な労働者たちに新たな集団的トラウマを残していった。1998年の労働者の自殺率が最高を記録したのは偶然ではない。2000年には、11,794人が自殺し、2001年には12,277人が自殺した。2002年

以降、今日まで、韓国では13,000人を超える人びとが自殺している。

4. 結論

さて、我々を死に至らしめる労働という不合理は、致命的な中毒を引き起こすシステムの産物としての、働き中毒にあるということは明らかである。しかしながら、この働き中毒は、資本によって押し付けられたものというより、労働は我々の人生・アイデンティティー・地位の中心にあるので、我々が進んで働き中毒に嵌まり込むのである。したがって、我々自身がこの複合的問題の一部である。要約すると、過労死は、（構造的に促進され、心理的に内面化された）働き中毒の結果であり、働き中毒は労働社会に向かう暴力的な近代化過程の結果である。この意味で、私は次のような結論に達した。

第1に、働き中毒に関するこの認識を、多くの人びとと分かち合わなければならない。出発点は、働き中毒が我々の内にあることを、これまでのように否認することではなく、認めることである。危機管理のために場当たりの責任を取ることによって、中毒を引き起こす社会・組織と協調してはならない。

第2に、働き中毒を促進する制度的、組織的な構造を変えなければならない。継続的かつ実質的な労働時間の削減は急務である。日本の2014年過労死防止法は好個の一例である。現行の労働法の強化や改善は言うまでもなく、生活を保証する賃金（guarantee for a livelihood wage）のような包括的な社会的セーフティネットは必要不可欠である。

第3に、より重要なことは、我々はなぜ、お互いに競争し、分裂しているのかを問うことによって（社会連帯の構築）、深く根を張った集団的恐怖を克服することである。生存の恐怖の克服なしには、ライフワークバランスも法的強制も私たちの生活に好ましい影響をもたらすことはできない。働き中毒が我々全員にとっての現実であることを考慮すれば、それを克服することは決して容易なことではない。しかしながら、我々の恐怖と、この社会の病を引き起こす諸原因に、我々は共に立ち向かわなければならない。

Heide, Holger(1997, 2000), "The Creation of Individual and Collective Strategies of Survival as a Pre-Condition for Capitalist Development: The South Korean Example," Paper originally presented at a Conference on Korean Studies in Osaka, Japan, in 1997 (in English) and published in Korean, In: *Escaping from Work Society*, Seoul: ParkJongCheol Publisher. ([in Korean](#))

Jeong, Byung-wook(2017), "What will we do at the Center for Karoshi Prevention?" Proceeding for an opening discussion of Karoshi Prevention Center in Seoul, 2017. 11. 8, pp.15-19. (in Korean)